

---

# 変わらないもの

うな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変わらないもの

### 【Nコード】

N2970Y

### 【作者名】

うな

### 【あらすじ】

朝。学校へ行くと赤色のマツキーで私の机にでかどと書かれていた。だから朝の会でこのことをせんせいに報告した。せんせいはすごく怒って皆に目をつぶらせた後、犯人に手を挙げるように言った。あたしは目を瞑った。誰も手を挙げなかった。目を開ける。せんせいは顔を大きな声で怒った。嬉しかった。

「起」

死ね

朝。学校へ行くと赤色のマッキーで私の机にでかでかと書かれていた。だから朝の会でこのことをせんせいに報告した。せんせいはすごく怒って皆に目をつぶらせた後、犯人に手を挙げるように言った。あたしは目を瞑った。誰も手を挙げなかった。目を開ける。せんせいは顔を大きな声で怒った。嬉しかった。

「承」

「相川は低学年の時にもイジメにあったんですか……」

「ええ。私も生徒や当時担任だった先生にお聞きした程度なので詳しいことは分かりませんが、結構過激だったらしくて。『ランドセルに牛乳』だったり『教科書に落書き』

なんて感じのが本当にあったらしんです。三ヶ月近くそんな状況が続いていたらしくて……偶然犯人を見つけた浜田さんが教えてくれなかったらどうなったことか」

「浜田？ 二組の浜田ですか？」

「そう。犯人が見つかった後も色々フォローしてあげてたみたいで。本当は教師がすべきことなんでしょうけど、現実問題なかなか難しいですしね……」

「正反対な二人なのに仲がいいのにはそんな理由があったんですか。けど今年、浜田は別のクラスだし、相川は辛いでしょうね……」

「うーん……一概にそうとは言えないと思いますよ」

「どうしてですか？」

「イジメがあったという事実は相川さんにとって辛いことなのは間違いないです。けど、今の彼女はちゃんとそれを口にできたでしょう？ 以前は誰かの助けを待っただけだったのに。彼女自身の成長は勿論ですけど、山田先生のお蔭でもあると私は思います」

「相川が僕を頼りにしてくれてる、と？」

「若くてカッコいいお兄さんに憧れない女の子なんていませんよ」

「……からかってます？」

「あんまり深刻になるなよー、青年。対処すべき事柄が判明した時点でほとんど解決したようなものなんですから。後は……言われなくても分かりますね？」

「……僕次第ってことですか。分かりました、なんとか頑張ってみます。相談にのって頂いてありがとうございます」

「転」

結局、相川に対するイジメはそれっきりなく、彼女は無事に卒業していった。

ただ、それで彼女と僕の関係が切れてしまったかと言えばそんなことは全くなくて。あの後色々と相談に乗っていたこともあってか、中学に上がってから折りに触れて会話を交わす機会があった。相川の家庭環境は割と複雑で、思春期の少女からしてみれば居心地が悪いものだったのだろう。本来であれば親に言うようなことまで僕に相談してきた。友達のこと、部活動のこと、進路のこと……。考えつく殆どの相談を受け終わった頃には、僕にとって彼女は年の離れた妹のような存在になっていた。

例えば、呼び方が相川から未央に変わった。なんの抵抗もなくじやれ合えるような関係になった。一人っ子だった僕にとって彼女はまさしく妹だったように思う。

そんなくすぐったいような心地よい日々を終わりを告げたのは未央の高校進学だった。かねてより問題のあった家庭環境——母

親の再婚相手が未央に性的暴力を振るうようになったのだ。僕は迷わず未央に県外の全寮高校へ行くことを勧めた。幸い彼女の成績はかなりよかったから特に問題もなく、彼女自身家から離れたいと思っていたため適当な理由をでっちあげて名門女子高に入学した。

今時携帯談話の所持を禁止しているような学校だから未央とのやり取りは手紙が主になった。月に2、3通の手紙に書かれた内容の殆どは女子高の人間関係の難しさを記したもので、未央が卒業するまでの三年間、僕は自分の浅はかさを悔い続けることになった。

……そして、現在、未央は大学二年生。二十歳だ。

「先生は相変わらず若いなあ。なにか秘訣でもあるの？」

未央が艶やかな黒髪を揺らしながら首をかしげる。そんな何気ない仕草すらもことなく洗練されていて、それが女子高で培ったものだと聞いた時には自分をほんの少し許せた気がした。

「むー。先生、ちゃんと聞いている？」

「ああ、悪い悪い。しかし若い秘訣なあ……若い奴らから吸ってるからじゃないのかな。少なくとも気は若くいられる気がするよ」

「ふうん……あんまり参考にならないや」

「参考ってなんだよ。未央はまだまだ若いだろ？」

「もう！ またそうやって子供扱いするーっ！」

「扱いじゃない。子供なんだよ、お前は」

外見は驚くほど大人びた。けれど中身はまだまだ子供そのもの。こうやって指摘してやるとむくれて怒るのがいい証拠だ。

「ほら、なんか買ってやるから機嫌直せって」

ぽふつと頭に手を置く。まだ不服そうな顔をしていたが物欲には勝てなかったのか、近くの喫茶店へ僕の手を引いて行った。

「結」

十年。その歳月は女兒を女性に変え、教え子という言葉を完全に払拭してしまった。最初はただの教師と教え子だった。それが次第に兄妹のような関係になつて……………

「ただいまー」

「おかえりなさい」

エプロン姿の未央がぱたぱたとかけてくる。につこりと満面の笑みを浮かべながら。

大学卒業後、未央は見事に路頭に迷った。元々就職口が広いとは言い難い学部であつた上、彼女自身が就活にあまり熱心でなかった為に見事に売れ残り…………ごくごく自然に僕の家に住み着いてしまった。僕としては色々と思うところがあつたのだけれど、相も変わらず劣悪な家庭環境の中に未央を戻す選択などとれるはずもなく。結果、世に言う同棲という状態に落ち着いてしまったというわけだ。無論、今の関係が褒められたものじゃないのは分かつているし、僕の職業を考えれば世間体がよろしくないのは早急に『解決』してしまいたのだけど…………。

「色々考えたんだけどね、やっぱり六月がいいと思うの。フェアとかもやってるみたいだし」

未央はマイペースだ。昔は自分の意見を大っぴらにできるタイプ

ではなかったのに、今では僕の都合もお構いなしに自分を押し出してくることもしばしば。率直に言って図太くなっただと思う。不幸にも彼女の生活環境は決して安楽ではなく、自分の意見も口々にできない女兒で居続けることは許されなかった。僕も僕なりに支えてきたつもりだけれど、それだけじゃ足りないのが現実で。猫背でうつむきがちだった彼女は幸か不幸かもうどこにもいない。

「未央は変わったよな」

「ん？ なにがー？」

「性格とか、色々。間違いなく強くなっただよ、お前は」

僕の言葉に未央はきよんとする。そして次に思案顔を作り、口の端を持ち上げて何か含みのある笑みを浮かべた。冷笑と微笑が入り混じったような、そんな貌。

「あたしは何も変わってないよ、“せんせい”」

ぞくり、と。正体不明な寒気が湧き上がってくる。未央が未央でないような、何か酷い間違いを犯しているのではないかという焦燥感。

「あたしはずっと“せんせい”が好きだったの。その頃から何一つ変わってない。だから、あたしは今こうしていられるの」

その告白が、どうしてか寒気を加速させる。未央はもういつものように笑っているのに、愛らしいその笑顔が別のものに見えてしまう。

「ね、“せんせい”。ちょっと早いけど……」

甘い囁きと同時に熱が生れる。真実の芽を焼き殺すような獰猛な  
猛りが何もかもを有耶無耶にしてい——く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2970y/>

---

変わらないもの

2011年11月12日20時21分発行